

思い出すことなど

河野 眞

I. 赴任当時の思い出

1-1. 着任の頃

2017年3月で定年を迎える。45年の勤務であった。振り返ると、昭和47年（1972）年4月のことで、教養部のドイツ語講師としての赴任であった。内実は、愛知大学文学部の板倉鞆音教授と、その数年後輩で、私の学部・大学院を通しての指導教官、谷友幸京都大学教授の間で話ができていたところがあった。もっとも選択肢はあって、ある国立大学とどちらかかどうか、ということだった。しかし、ずっと関西育ちで、それ以外はなじみが薄かった。もっとも豊橋という地名も、それまであまり考えたことがなかった。いつだったか深夜の鈍行で東京から京都へ帰ったとき、夜が明けてしばらくしたころ、急に通勤で満員になったので外を見ると、それが豊橋駅だったという記憶があった。

赴任した当初のことだが、春の陽気で渥美線の線路にタンポポが咲いていた。それがたいそう鮮烈で、ほのぼのとした感慨をもった。タンポポの綿毛一ひら飛び来たり、いずこよりする便りなるらん、という歌が口をついて出た。

当時は、まだ学園紛争の余波が残っていた。教養部教授会で私の歓迎会を開いていたのだが、会場は今も石巻山の中腹で営まれている名志苑だった。またその会は、3月に急に退任された細迫朝夫教授の送別会を兼ねていた。学園紛争が激しく、私が前年の晩秋に事前の挨拶に来たときには、細迫学長の行方が知れないという騒ぎだった。その結果が、歓送迎会になったのだった。幹事は、体育の原田康明助教授（当時）と、同窓の2年先輩の新津嗣郎講師（当時）で、新津先輩は、余興に謡曲「菊慈童」をうたってくれた。私はそのときだけは上座の一角に座ることになったが、教養部長は藤田美樹志教授で、頼もしい行政者という感じだった。その時期には学長代行として時局の処理にあたっておられたようである。

学園紛争といえば、私自身も、それで1年を棒に振った。学部4年で大学院へ進むはずのところ、その年は大学院入試への反対運動が起きた。そのため、入試を受けるわけには

ゆかず、留年を選んだのである。もっとも、私の学生時代は、数年続いた学園紛争とまったく重なるので、大学の授業が1年以上にわたって実際は行われなかったという異常さだった。

ところで赴任にあたって、指導教授の谷先生から厳しく言い渡されたことがあった。時代は、大学院を修了する者の数に対して求人が3倍くらいという状況ではあったが、それはそれとして、〈青田買いで大学教員になって、あの程度か、と言われぬように、研究には精進せよ〉というものだった。他にも、あれこれ注意を受けたが、一番肝心な〈研究に精進〉だけをはっきり覚えていて、しかもあまり守っても来なかったと今になって思ってしまう。

指導教授の意向は、他にもあった。10年足らずの間に3回、別の大学を移ってはどうか、というものだった。実際、その都度、それらの大学から豊橋へ主任教授たちが誘いに来てくれた。もちろんたいそう感謝したが、結局、応じなかった。それ以後も、数回そういうことがあったが応えることにはならなかった。それには時間が経つとともに、自分の研究の環境が整っていったことも関係していたと思う。その一つは図書費が比較的多く、国立大学の平均の2倍以上が計上されていた。田舎の大学だが、それだけに先生方に図書で不自由はさせないというのが、私が赴任したころから長期にわたって事務方のトップだった岩井透事務局長の考え方で、それを直接聞いたことがある。実際10年経ち、20年経ちするうちに、自分の研究分野では愛知大学が日本で最も図書が充実した大学の一つになっていった。逆に言うと、一人で毎年の図書費を当てて何十年か経つとある程度の研究環境になるというほど、私がかかわった学問領域は特殊だったということでもある。これは後に少し触れようと思う。

1-2. 研究環境

また本学での最初の十数年となると忘れようもない大きな存在があった。ちょうど赴任した年から12年にわたって学長を務められた久曾神昇教授である。偉大な国文学者、久曾神先生の名前はそれ以前から知っていた。佐々木信綱の名前で刊行されていた『日本歌学大系』を実質的に手掛けておられたことをどこかで聞いていた。私はドイツ文学のなかでも詩学に関心があり、バロック時代の詩歌論などを読んでいた。そんなことからそれに相当する日本の歌学書のごく一般的なものや江戸初期の俳論などをときおり覗いていたのである。後に久曾神先生からは声を掛けられるようになった。時には、それは研究のアドヴァイスであった。大学に勤務していると、暇がありそうで実際にはまとまった時間が案外とれないが、細切れの時間をどう使うかというコツのようなものを教わったこともある。また小さな成果を本にまとめてゆく上での手順についての具体的な説明のこともあった。だいたい先になるが、そのアドヴァイスは本当に役にたった。あるいは、今もその時の教えに従ってささやかながら実行していると言ってもよいほどである。

気候風土に加えて研究環境が、長く居続けた主因だったが、なお副次的なものもあった。これを書き出すと、研究生活からは話題が離れてしまうが、この小文では、むしろそうした話題の方が合っているかもしれない。それゆえ以下は、自分の愛知大学での過ごし方ではあまり比重の高くないことがらを書きとどめることになる。

1-3. 研究室問題

そのきっかけはちょっとした不如意だった。私が就職した頃は大学の拡大の時期で施設が追いつかず、研究室が足りなかった。そこで板倉教授が、自分は実際には使わないので、ということで私に部屋を使わせくれた。そして連日、深夜まで研究室を出ずにドイツ語の小説や研究書を読んでいた。ところが、翌年、赴任した5人か6人がやはり研究室がなかったので、事がやや大きくなった。私は、間借りで不自由しなかったが、次の年の数人は相部屋で不満がたまった。それで要求運動が起きた。私は1年先に来ていたのと、自分は実質的には不自由ではないという負い目から、交渉役になった。そこで双方ともに言い合いになったのだが、そこで言われたことがある。そんなに主張するなら何とかするが、一言いうなら10年愛知大学に勤めるつもりでいてくれ、二言なら20年だ、という冗談とも本気ともつかない返答が大学の要路者から返ってきたのである。できるだけ長くいてくれ、というような要望がやりとりのはずみにせよ大学の運営者から発せられるなど、今では想像もできないが、そんなことがあったのが、外からの誘いを受けなかったことにどこかでつながっている。

II. 三好校地への進出の論議

2-1. 不幸な出発

しかし、その後の動きは、そんなのどかなものではなかった。この小文も、そのあたりを取り上げるので、残念ながら、これから先は殺風景な話になってしまいそうである。

就職して9年目に、教養部選出の評議会委員になった。そこで起きたのが三好校地への進出問題だった。いずれ名古屋圏への拡大というもくろみから、愛知大学は大高にかなり広い土地を所有していたが（現在の大高緑地）、その真ん中を道路が通ることになり、大学のキャンパスには使えなくなった。そこで三好町の山林が候補になったのだった。しかし、それは最初から、不幸な出発だった。当時、私は、法学部の前田耕造教授と懇意にしてもらっていた。きっかけは、教授がドイツへ出かけられたときに手紙などのお手伝いをさせてもらったことだった。偶々だったろうが、研究室棟の控室で本間喜一名誉学長に紹介されたのも前田教授によってだった。私がお辞儀をしているあいだも、前田教授は直立不動といった感じだった。名誉学長が大柄に見えたのを思いですが、一種のオーラだった



前列中央：前田耕造教授 左端：筆者（1981年）

のかもしれない。

前田教授は勉強家で、若いときには「利息の制限」という論文などがある（『契約法大系 第3巻：貸借・消費貸借』有斐閣 1962 所収）。そして三好進出への徹底した反対者だった。その理由もはっきりしていた。あるいは、勘どころを押さえていた。一口に言えば、斡旋者に問題があるというのである。斡旋したのは卒業生のなかでも切れ者として知られた某氏で、前田教授は学生時代からよく知っていたらしい。あの人はたしかに頭はよいのだが、小回りに堪能なタイプで、大学のような長期の計画には不向き、というのが前田教授の見立てだった。そればかりが話題だったわけではないが、前田教授の研究室に時々あつまっていた。後に学長となられた石井吉也教授も一緒だった。ところがその前田教授が思いがけず急死された。そこから情勢が変わってきた。バランスが崩れたのである。日増しに三好進出推進派の力が増していった。私は評議会委員を辞めてからも、反対する立場をとり、自分でも土地を何度か見に行った。後に問題になる隣接する塵芥焼却炉も自分の目で確かめた。

しかしバランスはさらに推進派に傾き、気づくと、反対派は2割いるかないかという状況になった。それが私のマイナー・オピニオンの立場の出発点になった。実際、その後の10年近くは苦しかった。三好進出に反対した一派とのレッテルを貼られてしまったからである。

2-2. 三好進出をめぐる最後の談判

今も鮮烈に思い出すのは、反対派と理事長（学長）・事務局長との最後の談判ないしは

話し合いである。反対派のリーダーは見城幸雄法学部教授だった。1984年の12月だったと記憶しているが、豊橋校舎の本館（かつての師団本部であるが）の学長室のとなりの応接間だった。出席者は三好町進出の賛成派も中間派も混じっていた。私は、若いので、一番うしろで聞いていた。そのときの趣旨は、これ以上反対はしないが、進出するにしても校地の借地部分を残したままではリスクが大きいため、それだけは解決してくれ、という申し入れだった。学長は就任して間もない浜田実法学部教授で、すでに決定は済んで事態は動いていたが、土地買収はなお完全ではなかった。学長は、黙って聞いておられたが、突然人が変わったようになってしゃべり始めた。借地をかかえたままの進出はやめよ、というのは、もはや反対しないと言いながら実質的には反対をしているということではないか、と切り返し、借地がいかにも有利で賢明な選択であるかを滔々と説かれるのだった。日ごろは温厚な浜田学長のそんな饒舌は後にも先にも見たことがない。もっとも借地有利の論は、つまるところ、斡旋者の某氏の持論だったことが、やがて分かった。

考えてみると、借地をどうしても解消するには、もし不調なら進出を断念するという覚悟がなければ交渉はできなかつたろう。その点では、借地だけは解消せよ、というのは実質的に反対していること、というのも、立場を変えれば頷けないことはない。そして状況は、いったん進出へと学内世論が傾くと、喉から手が出るほどの空気になった。それをよく示しているのは、土地の重なりへの対応だった。地目が山林などの場合、公図と実測とはかなり食い違うことがある。それを解消するには、土地の重なった部分は複数の地権者から買い取ることになり、二重払いになる。そんなことがあっても、三好校地の取得には凱旋の報に接するかのごとく、快心の笑みを浮かべるといのが学内の空気だった。今後10年すれば、黒塚駅周辺は繁華な街になる、だから先手を打つ最後のチャンス、というのが推進する人たちの共通認識だった。豊橋キャンパスの北側の半分を売却する話が出たのも、そういう空気の中だった。それを大学財務のエキスパートだった会計学の野村晴男教授が必死に止めて、経費の計算をやり直した。

そうした空気ただけに、進出反対派への風当たりは強かった。反逆者さながらの白眼視があり、特に老教授たちは哀れだった。孤影悄然たるものですな、などと後ろ指を指されていた。その後の推移をみると、彼らの一徹は正常な危惧だったのではなかったか、と何か名誉回復があってもよさそうに思われる。

2-3. 三好キャンパスの発展から撤退へ

反対派の委縮とは対照的に、進出推進の人たちは意気軒高だった。やがて三好校地の建設の槌音が高らかに響き、また新築校舎は建築界の賞に輝いた。もっとも、その直前には、浜田学長が突然辞任するというできごとになった。評議会を舞台にいざこざがあったとのことで、三好校地推進派のなかで対立が起きたらしい。実態はよく分からないが、辞

意の撤回やそれをみとめない、などの得体のしれない攻防が続いていた。三好町への進出をめぐる漠然とした不安がそういう形で表面化したのではなかったろうか。

実際、三好校地を勤務地とした同僚たちは、それはそれで大変だったらしい。当初は植栽も貧弱で、やや殺風景な感じだった。山地特有の天候の急変が起きる土地でもあった。学内行政とは関係なく、勤務地を活発にしようと努力する人たちも少なくなかった。ドイツ語の竹中克英さん（後に法学部長）やフランス語の田川光照さんが、クリスマスに学生たちとのパーティを企画したりして、キャンパスらしきを出そうと知恵をしばっていた。そうした地道な努力が幾つも見られ、やがて三好校地は大学らしくなっていった。はじめは疎らだった植栽も鬱蒼となり、次第に自然ゆたかな学園へと変わっていった。

しかし環境がそうなったにもかかわらず、進出から10年ほど経った頃から、三好校地の先行きへの悲観が教職員のあいだに濃厚になっていった。もともと三好校地の活用については、通学には向いていないという観測が当初からみられ、全寮制の外国語学部（中国語を中心とした東亜同文書院の再現）などの案も出ていたが、そこまで思い切ったことはできず、やがて現代中国学部となり、その学部が三好校地からの脱出の急先鋒になっていった。大学運営者として現代中国学部を手塩にかけたのは、三好校地に心血を注いだ石井学長だったので、皮肉な巡りあわせである。

Ⅲ. 国際コミュニケーション学部の設置作業と学部発足

3-1. 発端

話は前後するが、その三好進出の決断から7、8年経った頃、教養部の改組が課題になった。またそれにあたって、教養部解消の代替の学部という意味での学部づくりが模索されるようになった。それ以前にも幾つか案が出ていたが、現実味を帯びるようになったのは1986年に教養部将来計画委員会最終答申として「総合文化学部」の構想がまとまったあたりからだ。しかし三好校地の発足を前に法経学部の3学部への分離という優先課題の前に立ち消えた。その後、「人文科学部」が提案され、さらに「総合社会学部」の構想も議論された。そして1994年になって有力な候補として浮上したのが、「人間環境学部」だった。ところがその発端が、私にはよく分からない。1994年から95年にかけてサーヴァティカルでドイツにいたのである。出発するときには、別の学部構想が計画に上っており、1年後に帰国した時には、人間環境学部計画の廃止案をめぐる対立になっていて、キツネにつままれたような感じだった。またそれと並行して現代中国学部が提唱されたが、こちらの方も1994年の春にドイツへ行くときには耳にしていなかった。ちなみに、この時はチュービンゲン大学の民俗学の研究所に滞在した。

やがて現代中国学部が新規採用人事をおこなう一方、人間環境学部は足止めという動き

になった。評議会でも何度か難しい投票があったと聞いた。申請直前に学長が待ったをかけたことが直接の原因だったが、経営を憂慮するブレインたちから、理系の学部への進出は、つまみ食いではすまず、どこまで理系の範囲を広げるかをよく考えないと歯止めがきかず大きなリスクになる、という意見が出て、学長に土壇場での決断をうながしたらしい。

今から見ると、それには運営の仕組みの問題があったと思われる。人間環境学部構想の場合、各機関で承認を経て、評議会でも了承されて成案となったのだった。したがって手続きを踏んでいることでは遺漏がなかった。しかし、大学の会議の通例として、最初の会議で通るとその後の各段階は、最初の会議の合意が大きな論拠となり、ほぼ自動的に追認されることが多く、会議を重ねることが必ずしもチェック機能につながらない。規模の違いはあれ、これは現在でもしばしば起きている。ともあれ、最終局面で経営判断上の懸念を学長（理事長）がはっきりさせたということだったらしい。それへの反発はすさまじかったが、背景には、当時は資金的に余裕があるように見え、理系学部を併せた総合大学化をめざす楽観的な空気が学内では強かったからである。

それがどう推移したか具体的なことは分からないが、1996年の2月になって、学長（理事長）の石井教授から、人間環境学部の廃案の後のこととして、代わりに教養部を基礎にした別の新学部をつくることで課題を果たそうと思うが、そのためにはたらいてくれ、という話を受けた。石井教授は、かつて三好校地をめぐる、はじめ反対だったが、やがて推進グループの中心になった人だった。しかし路線はどうであれ、大学の発展を真剣に考えている重鎮だった。他からも説得を何度か受けることになり、そこで新学部にかかわることを決意した。

しかし事は順調には進まなかった。ハードルも高かった。引き受けてから教えられたのだが、人間環境学部は学内のメンバー20人を基礎に構成することになっていたもので、それを超える人数を学内から集めることができなければ認めもしないし、学長が進退を問われかねない状況だったらしい。それは決して大げさでも、仮定でもなかった。評議会では、石井学長が選任した事務局長が学長に反対の姿勢を鮮明にしていた。

そうした状況下、設置委員長を引き受けるな、という各方面からの働きかけもしきりだった。私が断れば教養部を母体にした学部づくりのチャンスはなくなるのだった。なお言い添えれば、私は、新学部の中心になるなら、英語のS教授がふさわしいと考えていた。イギリスの文藝社会史の大家として知られ、何冊も著作があり、私のような駆け出しではなかった。しかしS教授は行政にかかわる意向がなく、また新学部は成否が全く見えない水物と言うしかなく、ポストを譲るとか譲られるといった呑気さのかけらもなかった。

事実、発足した設置委員会には、直接的には関係のないメンバーも入っていて、人間環境学部を廃案にしたことには不満や疑義をいだいていた。そのため、もし実現できなければ切腹を覚悟しているか、と凄まれた。単刀直入に、不調に終われば、大学を辞めてくれ

と言う迫り方もされた。しかし私は、では実現できれば、逆に貴方が辞めるのか、と切り返しはしなかった。そういう人の黙認をも得なければ事は期しえないからである。

3-2. 逼迫したスケジュール

難問であるのは、組まれることになったスケジュールからも歴然としていた。設置委員会の発足は大幅に遅れた。廃案になった学部の代替案の出發を阻止しようとする動きが繰り返され、申請にはほとんど間に合わないようなところまで来ていた。私が評議会へ呼ばれて国際コミュニケーション学部設置委員会委員長に選任されたのが1996年5月30日だった。その直前に新学部の設置経費25億円が決定された。そしてスケジュールだが、新学部申請は9月30日、その前に文部省での申請前の最終のチェックを受け、そして申請書類の印刷に要する時間から逆算すると、8月末日にすべての文書を仕上げなければいけない計算だった。書類には、「設置の趣旨」、「科目表」、「教員組織」の三点セットに、新学部の建物の設計図、そして法人関係の書類一式を揃えなければならなかった。新規採用もその間にすませる必要があった。そして早速7月10日には新学部の素案をもって文部省へ出向くようにとの段取りも組まれていた。

6月1日に新学部の設置構想を予備的にまとめた文書を発表して、新学部への学内諸単位からの移籍者の募集をはじめた。結果的に22人が集まってくれた。その人員の確定を2週間で終えて、6月15日から科目表づくりのための全員の会議へと移った。2学科構成は大学の基本的な枠組みとして決められていた。その一つ比較文化学科には樋野芳雄助教授（当時）にまとめ役になってもらった。言語コミュニケーション学科の方は安藤良太講師にお願いした。そして3人であらすじを作っていった。私が「設置の趣旨」の草案を書いて、それを二人に検討してもらい、会議に諮るということを何度か繰り返した。最終的には、樋野助教授が私の素案を見事な公式文書に仕立ててくれた。

安藤良太講師を座長にした語学教育のカリキュラムも難航した。英語と他の外国語の扱いと人員の調整である。英語関係の中心は田本健一教授で、古英語研究の権威で頼もしかったが、また意見調整で何度か暗礁に乗り上げた。しかし、それが却って新しい着想に結びついた。専任数人分を相当数のネイティブ教員の臨時採用に活用するTT制度はその難しさの産物で、後に他大学からも見学者が訪れるモデル・ケースになった。

設置委員会の議論も時には難しくなったが、英語の内田武彦教授が長老で、何かの時には頼ることができた。アイヴァン・コスビー教授とアンガス・マッキンドー助教授（当時）は、ネイティブ教員の再編成をたくみに進めてくれた。ドイツ語の新形信和教授と新津嗣郎教授、そしてフランス語の浜本正文教授の支援も大きかった。理系の市野和夫教授の見識も光っていた。

3-3. 各方面との調整

国際コミュニケーション学部の設置作業では、事務方も大変だったと思う。事務局の大半は反対だったのである。そのなかで企画総合課の活動を軌道にのせたのは、それが学長の路線ということがもちろん大きかったが、(後に本部事務部長を務めた)三島嘉門課長が仕事の達人で、加えて人間味があったことが大きかった。そして課員には、中島ゆりさん、熊谷正人氏、古河邦夫氏がいた。その4人と、樋野助教授、安藤講師と私を併せた一団で何度も文部省へ出向いた。

その間も、学内の諸機関に連日のように出向いて説明をおこなった。その頃の大学の運営は、一つの学部教授会でも反対すれば廃案になるという慣例が生きており、ましてその前に幾つかの新学部構想が立ち消えになったり、反対にあって挫折したりしていたので予断を許さなかった。その辺りを、同世代の奥村敏文学部長と海老沢善一教養部長が解決してくれた。また日ごろはリベルタン然として学内行政とは無縁だった浜本正文教授がそのときだけは評議会委員として存在感を発揮していた。これらの人たちの態勢づくりに沿って私が各单位を回って承認をとっていった。

経営学部などは難しいところだったが、野村晴男教授にまとめていただくことができた。会計学の野村教授は、私をはじめ評議会委員になったとき、兼任した財政検討委員会で財務諸表の読み方を一から教わった先生なのである。その野村教授が、河野がかかわるのなら赤字の学部にはなるまい、と保証してくれたのだった。もちろんそれは野村教授の過ぎた評価なのだが、私の考え方と重なってはいた。文系の大学のメリットは、特殊な設備、特に絶えず更新しなければならないような設備を備えなくても人をそろえればやってゆけるということにあり、それによる経費の抑制を活かすべき、という考え方である。

法学部では、江口圭一教授が学部長で、また文部省との交渉の責任者でもあった。人も知る日本近代史の大家であるが、何度か同道できたことは大学の業務としてだけにとどまらない余沢であった。

他にも、学部の創設というの、これほどこまごまと多くのことがあるのかと思うほど、次々に課題がやってきた。文部省への書類には、たとえば新設学部が地元の要望を受けてのものという項目を満たさなければならない。そこで近隣市町村のパンレットを見ながら、地元からの要望書の素案を書き、それを事務の方々が持参して押印を集めてくれた。なかには、予想に反して手こずったこともあった。最も近いはずの商工会議所もその一つで、三島課長と一緒に赴いてお願いすることが数回あった。当時、別の大学の設立計画があり、地元の財界がかなり肩入れしていたのである。

各種の課程を新学部に組み入れるのも簡単ではなかった。背景はあったのだろうが、教職課程なども、国際コミュニケーション学部は除外するという姿勢だった。と言って教職の専任を採るだけの余裕はなかった。そこを何とか頼み込んだり、人を介して説得すると

いったことになった。学芸員課程の担当者をかかえていたことが、相互乗り入れで妥協につながった面もあった。

「設置の趣旨」のなかでは、新設学部の将来性について説明する必要があった。常套的なのは、地元の教育界へのアンケートなども含めて業者に調査を依頼する方法だった。ところが関連する資料を見ているうちに、業者は、要するに発注者の希望に沿う結論を客観的と映りそうな体裁に整えてもってくるだけであることが分かってきた。しかも料金がかなり高いのである。それを見て、無駄金でしかない、と三島課長とも感想を言いあった。そして、形式的なものだから、自分たちで作ってしまおうということになって、手持ちの資料を組み合わせた。

あまり思い出したいくないことだが、中には、妙な動きをする人たちもいた。賛否が拮抗する学部では、条件を呑まなければ反対派に回るとの動きで、特にそれが人事の要求であるのは厄介だった。ほとんどは断ったが、正直に言えば、学部実現の合意づくりのためには呑むしかないものも僅かに出てきた。その辺りが最も苦しい選択で、後の病根をつくってしまった面がある。

3-4. 建物のこと

最後のハードルは、新学部の建物だった。学内には、挫折した（させられた）幾つかの学部構想の関係者が各所にて、当然ながら、概ね好意的ではなかった。そこで仕組まれたのは、学内には新学部棟のためのスペースがない、という状況だった。キャンパスのなかはどこもさまざまな団体の発言権のようなものがからんでいて、空き地はどこにもなかった。その窮状を救ってくれたのは、体育の山本茂紀教授で、顧問をしている水泳部の空間をそれにあててもよい、という温情だった。石井学長の力が背景にあつてのことではあったろうが、その空間の見通しがなければ豊橋キャンパス5号館は建たずに、計画は最後のところで潰えるところだった。なお設置委員会では垣内伸彦助教授（当時）が建物設計の担当で、会議では他に難問があつていつも後回しになるのだったが、最終段階では全員で設計図を囲んで案を練った。ちなみに中庭を設けるのは私の発案だった。

建物の設計ということでは、私は研究室とゼミ室を交互に配置することを主張したが、設置委員会では不評で実現せず、5号館の3階だけで教室についてそれを試みるにとどまった。私は、ドイツの大学で研究室とゼミ室が交互に配置されるなかで世界のトップクラスの教授たちが仕事をしている現場を知っている。設置委員会を主宰したものの、学生の空間と教員の空間を峻別すべしという壁はどうしても破れなかったのである。

短期大学部のことも記しておきたい。その学生定員の割譲を受けたことによって国際コミュニケーション学部は成立し得たからである。それが今日までつづく二つの単位のつながりになっている。

3-5. 学部発足を前に

申請まで何とか漕ぎつけると、後は新学部に必要な業務があれこれと続いた。節目ごとにパンフレットを作ったり、高等学校を手分けして訪問したり、といったもので、その間に何度か文部省の窓口とのすり合わせがあった。どれも多少、神経を使う仕事だった。その時期の国の大学政策を映していると思われる指導もあった。インド関係の科目やNPO活動への入門科目が指示されたりした。他方、ほとんど意味のない条件を引きずっていると思えるものも含まれていた。LL教室の設置がそれで、新学部でも実際にはほとんど使われることのないまま高額の施設を組み入れることになった。そういう細かい指示が解決への期限を切って言い渡されることが10回以上あったと思う。

あるとき、家族でスキーに出かけた、まだ携帯電話が普及していない時期のことで、スキー場のホテルに着くと、大学から電話が入っていて、文部省へ急に説明する案件が出てきたので、すぐに帰れという。そこで家族を残して、乗ってきたバスでもう一度ふもとへ引き返し、深夜に自宅へ帰り着くと、背広に着替えて、翌朝、東京へ向かった。

それに類したことが何度かありはしたが、すでに事はほぼ軌道に乗っていた。そういう細かい調整が何十もあり、また実地検証も大きな節目だった。そして最後は公聴会だった。しかし大きな節目では、事前にその方面の有識者に内々に見てもらう手順をはさんだので、概ね安心ではあった。そのあたりで、大学が培っていたノウハウが生きていた。

もちろん微妙な問題もありはした。再現はできないが、その一つはメンバーの資格審査だった。ちなみに、設置委員会を引き受けたとき、大学院づくりをはじめ大学の数種類のプロジェクトにかかわってきた先輩に注意されたことがある。そういう業務に携わると、どうしても同僚の査定が不可避だが、それは勢い不満や反発を招き、恨みを買うことも覚悟しなければならない、というものだった。実際に起きてみなければ分からないことだが、符合することがないわけではなかった。苦しくても張りのある仕事と違って、そうした問題は神経を蝕むところがある。それも含めての設置の業務だった。

3-6. 学部発足

1998年4月に国際コミュニケーション学部は発足した。新天地という感覚があり、誰もが新しい取り組みの工夫をしていた。建物が出来たのは、ようやく新入生を迎える直前だった。建物の正面には白い槿（むくげ）すなわち無窮花（ムグンファ）を植え、紫色を少し混ぜた。これは学部の性格と定員の二つの要素から、留学生を45人組み込んだことと関係している。それまで愛知大学では比較的少なかった韓国からの留学生を念頭においてのことだった。中庭にはメタセコイアやオリーブなど、五大陸の原産のものをそれぞれ選んだ。

言語コミュニケーション学科では、田本教授が（それまでの勤務地の三好町からの通勤

であったため) 連日大学に泊まり込み、文字通り不眠不休で発足間もない学部・学科の基礎作りに取り組んだ。何かを一から作るということは、それだけ情熱を傾ける人を要するのである。そこにイギリスでの研修から帰国した塚本倫久助教授(当時)が加わったことも大きかった。二人が礎を築いたことが今日の英語学科につながっている。

学部発足の最初の教授会の日、石井学長に来ていただいて発足記念の集合写真を撮った。また学部発足にあたって学生を交えた講演会を連続して開催した。もっとも前年からそうした企画は進んでいた。英語教育にちなんで遠山顕氏の講演会を開いたが、これは荒川清秀教授のお膳立てだった。また開設記念には樋野芳雄助教授(当時)の提案で、文化人類学者、青木保氏の講演会を開き、同じく高原隆助教授(当時)の提案で米インディアナ大学の文化人類学者ヘンリー・グラッシー教授を招いた。秋学期には、国際ビジネスの第一線で活躍する企業の担当者を連続して招いた。学部設立にあたって参加してもらった国際紛争仲裁協会の実務経験者である名和聖高教授の斡旋による企画だった。愛知大学の社会科学系の学部がいずれも三好校舎を所在地としており、豊橋校舎が人文系だけであることから、その方面の専門家にも参加してもらったのだった。名和教授は後に副学長として財務の難局に当たられることになる。

外から講師を招き、学生にさまざまな分野を知るチャンスをあたえるという企画は、その後、国際コミュニケーション学部の特徴となってゆき、20年弱のあいだに百回を超え



国際コミュニケーション学部発足記念 (1998年4月)

る講演会を開くことになった。それを中心になって切り盛りしたのは新任者の鈴木規夫助教授（当時）で、驚くほど実務能力に秀でていた。その15年ほどの記録は国際コミュニケーション学会の別冊シリーズとして一冊にまとめられている。

新任では、タイ研究の若手の参加を得たことも、愛知大学の歴史では転機と言えるものだったと思う。学内に幾らか背景があつての話ではあつたが、私は東南アジアの研究家を専任で入れるのは将来に生きると判断して、設置委員会でほぼ全員が難色を示すなか賭けを通させてもらった。それもあつて、タイのナレースワン大学と提携を結び、その業務で同大学を訪れることがあつた。なお付言すれば、その訪問を共にした上道功教授が後にやっかいなことになったが、私は大学の処理が最初のところで間違つた面もあると考えている。

年齢の関係で2年の在職だったが松下智氏を教授に招き、またその後任として北京大学の周星教授を組み合わせにしたのは、国際コミュニケーション学部の発足時の意気込みの表れだった。松下教授は茶文化の研究分野では特にアジアの茶について不動の位置を占めており、しかも町の学者だった。周星教授は若くして北京大学教授となった中国民俗学界のホープで、日本の諸大学から声があつたが、旧知の私に合わせてくれたのだった。

3-7. 光と影

ものごとには表と裏があるのが常だが、ここでもそうだった。設置業務に課せられていた枠組み自体が妥協の産物であり、未調整の要素を残していた。言語コミュニケーション学科の専攻言語として英語・ドイツ語・フランス語・中国語を詰めこんでおり、また同じキャンパスの文学部に英文・独文・仏文・中文が設けられているという重なりもそうだった。外国語系という文部省のカテゴリーの範囲でどこまで幅を広げられるかも実際の工夫では微妙なものがあった。比較文化学科に夜間主コースを併設することも参加したメンバーに影を落としていた。どれも突きつめると解決が難しく爆弾をかかえているようなところがあった。私の役割の一つは、いかにして空中分解を起こさせずに学部発足にまで持ってくるかにあつたと言っても過言ではなかつたのである。

さらに私の感覚と周囲とのずれもあつた。私自身が当時言っていたことがある。新学部は一夜城、これから張りぼてを堅固な角材に入れ替えたり、張紙仕立てを壁に塗り変えなければ、長持ちも成長もしないということで、それを説き始めたが、うるさく思われることが多かった。国際コミュニケーション学部の発足によって、長年続いた教養部改組をめぐる混迷は終わり、危機は去った、という安心の気持ちが広まり、私の課題意識とはギャップが広がりはじめた。多くをし残してはいるが、そろそろ自分の仕事は終わったようだ、と考えるほかなくなった。それも穏やかなかたちではいられなかつた。自治会費の委託徴収の存廃や、小さな組織に英語教育と他の言語との併存をしようとした当初から予

想された無理、その他、誰もすぐには解決できず、見通しも立たない問題が漠然と重なって、それが複雑な対立になっていった。

そうした空気が背景にあつてのことだが、国際コミュニケーション学部が発足し、2年目には全学の学部中、入学者の偏差値が最も高くなったものの、学内ではあまり歓迎されなかった。学部長会議へ報告に来た入試委員長の大島隆雄教授が、国際コミュニケーション学部が順調に推移していることを誉めてくれたが、入試委員長が退席するや、「こんな学部は早晚落ちてゆくよ」と苦虫をかみつぶしたようなコメントが会議室の上段から響いた。——本気かね、それとも作って言うのかな、真面目一方なら卒倒だな、と思ひながら聞き流した。

入試は比較的順調だったが、そうした不透明や不安定を反映して、学部のなかに小さな対立が幾つも生まれた。また確執の間を縫って、身勝手な動きがあちこちで起きるようになった。若手教員のなかにも、年長者の対立の間を縫って動いたり計算を遅しくする言動をとる者があらわれた。また、なんとなく体調が悪いと言って長期休暇をとり、期限切れのところまで出てきて、また長期休暇に入るといった行動も我慢するしかなかった。本当に体調が悪かったのかもしれないが、新学部は担当者の変更は監督官庁の承諾を得なければならぬ。その手続きを考えると、内部の調整でゆくのが無難ということになり、専門が近いことから、長期休暇の同僚の科目を学部長の私が引き受けるしかなかった。そんなこともあって、一番多い時には1週13コマを持っていたと思う。それだけが原因ではないが、通常、毎年5篇から10篇の論文や翻訳を公表していたのだが、学部創設の前5年間はゼロに近くなった。もっとも、私の場合、その程度で済んだということだろう。

3-8. 悲痛な回想

それを言うのは、私が新学部にかかわる直前のことだが、教養部教員の配属の人数をめぐって、経済学部長が自殺を図り半身不随の身になったことを考えてしまうからである。教養部教員の配属先は、文学部のように一切拒否し、ずっと後に渋々2、3人となったところもあれば、経済学部のように最初から十数人を割り当てられたところもあった。しかしその差異について合理的な理由づけなどあるべくもなく、利害の衝突とトップの匙加減と言ってよかった。無理な注文とは分かっても呑まなければ相当の圧力にさらされることになる。一時的にせよ行政にかかわって、その空気を経験することになり、他人事とは思えなかった。私とほぼ同世代で、昼休みでも寸暇を惜しんで講師控室で本を読むかメモをとるかしている姿をよくみかけた。大部な博士論文を書き進めていることを知っていただけに惜しみても余りある。私が国際コミュニケーション学部設置の作業責任者を要請されたのは、その惨事が起きて程なくだったので気持ちは複雑だった。そこまで事を極端化させた運営者への批判もあった。しかし、他方で、それほどの犠牲を出しながら、事態が打開

する兆しは見えなかった。その時点ですでにかなり長くお世話になっていた職場の危機であり、多少第三者の立場の者がかかわることで状況が変わるのなら、という思いだった。

犠牲といえば、廃案になった人間環境学部の推進者で教養部長の経験者でもあるM教授もその一人だと思う。本人はバランスのとれた良識のある紳士だったが、一緒に組んだ数人がよくも悪しくも鋭すぎた。学内審議の習性を突いたというべきか、学部構想自体の収支計算は帳尻があってはいたが、いったん理系に進出した場合、歯止めがきかず大学の体力を超えるのではと危惧する声を、外野からの雑音として排除しつづけた。それが、自ら



国際コミュニケーション学部 開設一周年記念（1999年4月）

審議にかかわるチャンスが実質的には無かった石井学長の土壇場での反発に凝縮してあらわれた。その後M教授が定年後まもなく病没されたのは、心痛が響いた面もあったように思われる。

3-9. 植屋春見教授の思い出

学部創設から2年目に体育の植屋春見教授が亡くなった。数年間の闘病の末であったが、学部発足の頃はまだ授業を担当しておられた。ちなみに、学部発足の頃の集合写真が2種類ある。一つは発足した1998年の4月で、石井学長を中心に記念写真に臨んだ。そのとき植屋教授は体調が悪かった。私はぜひとも一緒に写真を残しておきたかった。そこで翌年、もう一度撮ったのだった。亡くなる少し前に学部のメンバーに手紙を寄せられた。学部長を中心にまとまってほしい、という趣旨だった。内部で綻びが出ているのを察しての配慮だったが、少しは効果があったのならよかったと思う。また私にとっては、後

にスポーツに関心をもつようになったのには、植屋春見教授や山本茂紀教授と付き合えたことが大きい。もっとも、スポーツと言っても、自分でするのは、下手なスキーに出かけるのが楽しみだった程度である。ドイツ・スポーツ史の一部が私の研究対象に入ってきたのである。

3-10. 那須雅之助教授のこと

国際コミュニケーション学部の発足からまもなくのことで、いまだに残念で仕方がないことがある。那須雅之助教授を失ったことである。しばらく行方が知れず、やがて山中で発見された。それは国際コミュニケーション学部の設置作業というより、語学関係で複雑なものがあつたらしいことが、当時からも分かつてはおり、また後にご両親と一緒に整理したメモ類からもそれがうかがえた。脇から口出しができることでなかったとは言え、私が責任者となった学部に参加してくれた若い才能が消えたことは衝撃だった。学部創設の準備の一環で一緒に北京へ行つたこともあつた。学部発足から今年で19年であるが、那須助教授の猛烈な研究ぶりを伝える読書紙の切り抜きを今も手元においている。

3-11. 夜間主コース

国際コミュニケーション学部の構成を複雑にした一つの要因は、夜間主コースという制度だった。1学年80人で、必要ではあるが、数字はちょっと無理をしたところがあつた。事実、学部が発足しても、この部門は常に20人位だった。もっとも、このコースは文部省の方も定員充足についての注意をあまり厳しく言わなかつた。結局8年ほどで廃止したのだが、意味がないどころではなかつた。コースの清算はいずれ避けられなかつたが、個性的な学生が多かつた。昼間を受けるほどの受験勉強はしたくない、という生き方の信念をもっている学生も少なくなかつた。実際、彼らは、国際コミュニケーション学部の卒業生のなかでも、思いがけないところで活躍しているのである。中には大学の教員になっている人もいる。

3-12. 自己評価はプラス7：マイナス3

以上のような回想からは、私が大きな役割を果たしたかのような印象をあたえかねないが、決してそうではない。国際コミュニケーション学部の創設については石井吉也学長の堅固な意志が根本にあつた。そしてそれを支えたのは奥村敏文学部長だった。頭もよかつたが、また大学運営に費やしていた労力は並大抵ではなかつた。連日、何人もと面談をしたり、電話で調整したりであつた。そのことを後によく思い出した。というのは難病を発症して、しばらく闘病の後に亡くなったからである。それと共に、その後、愛知大学が経験した金融不祥事のことも考えてしまう。もし奥村教授が生きておれば、それは防げ

平成10年私立大入試
TOPICS

18

愛知大で国際コミュニケーション学部を新設
比較文化学科は昼夜開講制で生涯教育に対応

急速に国際化が進む現代社会では、異文化に対する深い理解が不可欠になりつつある。こうした状況に対応すべく、愛知大では現代中国学部につき、来年4月に国際コミュニケーション学部の新設を予定している。「国際文化大学」を標榜する同大学の新たな挑戦。学部長に就任予定の河野教授にインタビューを試みた。



愛知大学教養部
の
河野 真 教授

本誌 今回の学部新設の目的と、新設に至った経緯および社会的背景についてお話しください。

河野 急速に国際化、グローバル化が進行する現代では、異なる文化や価値観を身につけた人々と日常的な局面で出会うことが多くなっています。これを「多文化状況」といいますが、国際交流が盛んになればなるほど、国内外でさまざまな摩擦や紛争も発生します。こうした多文化状況のもとでは、異文化を日常生活のレベルまで理解し、外国語の実際的な運用能力を備え、異文化間の円滑なコミュニケーションを可能にする人材の育成が必要となってきます。

本学は昭和21年の発足当初から、設立趣意書に「国際文化大学」としての性格を明記し、国際交流を重視してきました。そして昨年の創立50周年を節目に、これまでの蓄積の上に、伝統的な学部とは性格の異なる、今日の状況に見合った新しい学部を構想しました。その一つが、今年4月に名古屋キャンパスにオープンした現代中国学部です。そして来年4月、豊橋キャンパスに「国際コミュニケーション学部」を開設する予定です。現代中国学部が中国あるいは中国人社会にターゲットを絞っているのに対し、国際コミュニケーション学部は多文化共生の時代を念頭に置いています。また、東海地区では実用的な外国語教育や、異文化理解の教育を行う高等教育機関が不足していますので、そうしたニーズに応えるという面もあります。

本誌 新学部では何を学ぶことができ、どのような資格が取得できるのでしょうか。

河野 新学部の教育内容は、「外国語」「情報処理」「文化の国際比較」「国際理解」の四本柱で構成されます。言語コミュニケーション学科（以下、「言語」と略）が語学教育に力点をおくのに対し、比較文化学科（以下、「比文」と略）では言語と文化の内容とのパラメータをとりながら、異文化理解を深めていきます。

『言語』では、英語・中国語・フランス語・ドイツ語のいずれかを中心に小人数教育を行い、英語は英検1級以上、他の言語は各検定2級の取得を目指しており、「外国語学科」的な性格が強いと言えます。しかし必修の「日本語コミュニケーション技術」で、レポート作成や口頭発表の技術を身につけるなど、コミュニケーション全般の能力向上に配慮しています。

『比文』では、アジア・欧米・日本の文化を国際比較の観点から取り上げながら、異文化理解を目指します。中でも東アジア・東南アジアについては、よく「21世紀はアジアの時代」と言われるように、経済発展が顕著で、日本との関係もますます深まる傾向にありますので重視しています。語学の単位も多めに設定しており、英語の他、中国語、韓国・朝鮮語、タイ語、フランス語、ドイツ語と多様な言語を学べます。また、これらの国々への語学研修や留学のルートも準備しています。

本誌 カリキュラムの特色についてお話しください。

河野 4年一貫の系統的なカリキュラムなので、1年次から専門分野を学ぶことができます。また、セメスター制（1学年2学期の短期集中方式。原則として各セメスターで単位認定）を導入しました。

広報の一例：旺文社教育情報センター（1997年8-9月号）

たと思う。それほど情報に通じ判断力に秀でていたのである。思い切りもよく、反対派が占めていた建設委員長の解任動議を評議会に提出して、自分が代わって切り盛りするといった辣腕も見せた。しかしそこには私心がなかった。もっとも学部利害への代表者の立場からの言動もなかったとまでは言えないかもしれない。しかし本ものの秀才だった。また国際コミュニケーション学部の設置では、先に挙げた江口圭一法学部長や海老沢善一教

養部長の存在も大きかった。これらの大立者の援護を受けながら、私はその下で実務を担当したのである。そして自己評価では、7割方は何とか妥当な判断をしたが、3割のミスをおかした。見方によってはその比率の査定はもっと辛くなるだろう。とまれ、それが国際コミュニケーション学部の今日のプラス面とマイナス面の遠因にもなっている。

IV. その後の推移から

4-1. 運営システムの変化

石井吉也学長の後、武田信照経済学部教授が学長になられた。ある種の冷厳さのあった空気はそれで一変した。しかし後から振り返ると、武田学長の8年間に愛知大学の運営はまったく変わってしまった。きっかけは副学長制と常任理事会の設置で、ここに権限が集中するようになった。それまでの、全学の合意をとりつけるためには関係者が必死で説得しなければならないというシステムが嘘のようになり、学長とその指名による数人で重要事項は策定され、それが上から降りてくるようになった。そのシステムは、短期で病死された堀彰三学長をはさんで佐藤元彦学長によってさらに強化された。大学評議会が経営には実質的には関与がむずかしい仕組みに変わった。しかし、そこで起きたのは、不正な金融取引による損失だった。経営担当副学長が2代にわたって商品取引まがいの金融商品に手を出した。結果はリーマン・ショックで全国の大学中、上から何番目かというほどの巨額の損失を出した。武田学長は知らなかったで押し通した。佐藤学長も自己の経営担当副学長のときの関与について口をつぐんだ。解明に向けた多くの人たちの努力によって実態はあきらかだが、公式には大きな闇が残っている。

もっとも、これも発端は文部省の姿勢が素地となった面がある。2000年から2003年あたりのことだが、私立大学の経営陣を相手に、文部省の幹部たちが資産運用の必要性を説く講演をおこなったり、その種のセミナーへの来賓として顔を出すといったことが相次いだ。そういう時代になったのか、と、参加して帰ってきた事務局の上層部がむずかしい顔をしていた。そのうちに証券会社が、私立大学が基本金の名目などで保有する資産を目当てに金融商品を一齐に売り込み始めた。そして全国の百校近い私立大学がそれに応じた。リーマン・ショックの直後、文部科学省に対して数十の大学が善処をもとめる嘆願をしたのは、流れからは無理のないものに見えた。それは結局どうにもならなかったのだが、愛知大学もそうした大学の一つになってしまった。これには、大学の運営システムが大きく変わったことも関係していた。なお言い添えれば、学内の教職員での運営だからそうだったので、外部の理事に運営を任せればよいという意見もあるが、それまた実態とは合わない。巨額の損失を出すことになる金融取引に声援を送っていたのは、理事会に席を占める外部の有力者たちだったからである。

4-2. その後の推移：英語の人員増と、繰り返された学部・学科の再編要求

国際コミュニケーション学部は発足後も必ずしも安定したものではなかった。私は学部長を辞めてからも、しばらく連絡教授会のメンバーで、また大学院国際コミュニケーション研究科長でもあったので、多少の責任は負っていた。その時期に最も力を注いだのは、英語担当教員の増員で、これは大変だった。結果的には学部の完成からもまなく2名の増員が実現した。二人とも言語コミュニケーション学科の配属とするように調整したのだったが、それはプラス・マイナス両面の結果を招いた。もちろんそれだけが原因ではないが、言語コミュニケーション学科と比較文化学科の入学者の偏差値に開きが出てきたのである。

その隙間を突くように、学部・学科再編が外部から要求されるようになった。大きなものだけでも3回起きた。うち2回は武田学長の下で副学長を務めた二人がそれぞれ国際コミュニケーション学部の再編案を突きつけてきた。最初は2003年の全学将来計画委員会案で、国際コミュニケーション学部を文学部と併せて再編という基本方針だった。国際コミュニケーション学部の設置の推進者であった海老沢善一教授が副学長を辞し、次に国際コミュニケーション学部の創設に反対していた文学部の教授が副学長になったとたんにその案が採択された。学部創設の頃、国際コミュニケーション学部生を全学の教職課程から除外するという方針だった人で、それを崩すのに手を焼いたものだった。

次はその3年後で、あたらしく副学長となった教授が、国際コミュニケーション学部のうち比較文化学科の廃止を常任理事会素案として推進した。一見形は整っているが、実態は、副学長のフライイングと言ってよかった。しかも、情念的なものが底にわだかまっていた。まったく別の話なのだが、かなり長期にわたって留学生別科が設置されていた。しかし時宜にあわないとの声が挙がり、結局廃止に至ったが、推進したのは国際コミュニケーション学部の同僚だった。ところが、別科の創設と維持に身命を賭したとの自負をもち、やがて副学長となった某氏には、それが許しがたい所業だったのである。本人からさんざん愚痴を聞かされていたので、感情的には分からないわけではなかったが、役職者となったことで鬱憤と権力が重なったのである。あの手この手で防戦したが、そうした因縁のようなものが背景にあって組織の変更案が大学の成案となるような安易な運営体制には納得がゆかなかった。何かが、どこかでおかしくなっていた。

4-3. 留学生の入学不許可の後始末

2007年3月のことだが、私が主に推進した中国の大学との協定で入学することになった留学生約10人の半数について、入国管理局から許可が下りなかった。預金残高を証明する銀行の書類の印鑑に偽造のうたがいがあると言うのである。評議会でも、すんでのところひどい目に遭うところだったとの批判が飛んだ。しかし私は、それはあり得ないと

確信していた。そこで調べたところ、入管の誤認であることが分かってきた。

どういう誤認かという、銀行の印鑑は、銀行の本店から各支店に仕様書が交付される。〇〇銀行なら、楕円形で三分割、上中下にどんな文字を入れるか、そして寸法はどうか、といった細かい仕様書で、それをもとにそれぞれの支店が印鑑を作る。したがって仕様は同じでも支店ごとに違いが出る。大手銀行の上海本店と杭州支店でも微妙に異なる。杭州の中でも、支店によって異なる。それは当然のことだが、それを入管は偽造だと思いつ込んだ。もし照らし合わせるなら、過去の証書もふくめて同一銀行の同一支店の印影を照合すべきで、同じ時期の他の支店の印影を比べるのは意味がないのである。そして、その事実に気づいた大学が数校あらわれた。近隣大学のなかには入学予定者を数十名の規模で不可とされて困惑するところもあったからである。数大学が苦情を申し立てたので、入管も気づき、改めて許可を出した。しかしクレームがあれば再許可をするが、苦情を言っこないところへ入管から修正をするわけではなかった。愛知大学では、6月初めになって入管が許可を出しているのを伝え聞いても、今頃許可を出して今年のはんびりしているな、などと呑気なことを国際交流課の課長は言っていた。私は事態を学長に説明したが、いったん決めたことは動かさない、と副学長が猛反対をした。そのうちに入学不許可になった中国人入学予定者の父母が声を挙げた。そこで中国へ調査に赴いた。その前に中国の銀行業務にくわしい専門家に問い合わせた。そこで言われたのは、次々に新卒の不正が出てくるなか、入管も対応に苦慮しており、見落としに気づけば現場の大学からそれを指摘して協力することが大事でしょう、とのことだった。正にその通りなのだが、そういう柔軟性は、愛知大学にはなかった。中国での調査結果を書類と録音で報告したのだが、いまさら間違いだったと評議会で報告するわけにはゆかない、どの時点かで教授会だけでやってくれ、ということになった。そうして遅ればせに処理したのだが、あちこちで組織のパイプがつまっている感じがした。

そのことがあって、その方面について自分でも事情をつかもうとした。そして大学の対外関係、特に留学生の送り出し国の事情を把握し適切な判断ができるための国際交流業務の洗い直しを提案した。それは一般性のある課題でもあるので、そういう人材養成を大学院に組み込んでよいのではないかという内容だった。しかし、それが受けとめられるよう状況ではなかった。

4-4. 何よりも残念なこと

そして最も残念なことが起きた。2008年2月3日の、あのスキー事故である。長野県梅池高原で体育の正課として実施されたスキーの実習中に国際コミュニケーション学部の2人の女子学生が亡くなったのだった。二人とも私の講義科目「比較文化論」の受講者だった。大教室なのでそのときは分からなかったが、後に写真を見て、あの席にいたのが

そうだったのかと見当がついた。当日は、事故を聞いてただちに豊橋校舎へ赴いた。すでに新聞記者が集まっていて、大学は説明に追われていた。そのとき、何かおかしなものを感じた。たしかに事故の詳細が分からず、誰もが途方に暮れていたのだが、妙に役所臭さがただよっていた。スキーに同行していた教職員についての異常な情報規制で、組織がどこか病んでいた。その頃、私以外にもそれを感じた人はおり、心配の方向が本末転倒ではないか、との感想は何人かから聞いたものである。あたかもリーマン・ショックで巨額の損失を出す半年ほど前のことで、後に資料で確かめると、すでに実損が相当額になろうとしており、それがひた隠しにされていた時期でもあったのである。スキー事故と欠損とは次元が異なり、どう関係しているかは確かめようがないが、私がやがて大学の金融不祥事について批判の文書を出すようになる心理的な核のようなものは、そこにあったと言ってもよい。亡くなった女子学生のお通夜に出かけたが、大学関係者は中へは入れもらえず、その時ひいた風邪は数か月も長引いた。

4-5. ささしま進出をめぐる

もう一つ、書き加えておくとすれば、やはり現在の「ささしま」の土地の問題である。先にも記した三好校地に借地が混在していたことは、その後の愛知大学の頭痛と損失のタネになった。それを知っていたので、まず底地を買い取ってからではなかろうか、との見通しを各方面に説いた。リーマン・ショックの直後のことで、大学も苦しかったが、逆に入手するにはチャンスでもあった。しかし、またもや借地が有利で賢明という考え方で事は進んで行った。三好進出のときに借地を残すのを選択したのと同じ感覚が今度もはたらいたのである。たしかに、その方が建設は早まり、いかにも景気がよく見えるのだが、足元を固めることが先決ではなかった、という感想は残る。三好校地進出問題でマイナー・オピニオンを運命づけられた私は、今度もまたマイナー側に属してしまったのである。

4-6. 名古屋キャンパスへ移転による前提の変化：観光学の再考も

それにちなんで、学部創設とその後の何度かの調節とのかかわりで、少し記しておこうと思う。国際コミュニケーション学部の設置構想における大きな課題の一つは、文学部との住み分けだった。同じキャンパスの人文系学部で、メンバーの専門が重なっているところも少なくなかった。英語、ドイツ語、フランス語などの外国語がそうであり、また比較文化学科でもその傾向があった。何とか違った持ち味をと考えて、2学科にまたがる側面からの持ち味として国際文化関係論や国際ビジネスを取り入れたが、当時の文部省の窓口では、〈きわどい球〉と評されたものだった。観光学の教育を学部の将来の柱の一つとして私が推進してきたのも、文学部との持ち味の違いを出しながら、将来性を考えたのである。

ちなみに大学での観光学、特に国際観光の学部教育となると、概ね二つに大別される。



ゼミ旅行 滋賀県長浜ガラス館にて (2011年1月)

一つは経営学の一部門として設ける行き方、もう一つは異文化理解で、後者はエスノロジーや地理学の専門家になうことが多い。国際コミュニケーション学部は文部科学省の分類では人文系で、特に外国語学系とされていることから、そこでの観光学教育は異文化理解にならざるを得ない。しかし全国の大学の動向を見ると、社会のニーズに応え、したがって成功しているのは経営学の系統のことが多い。もっとも、全国の主要な数大学の観光関係のカリキュラムを見わたすと問題点も見えてくる。専門学校と異なり、大学であれば観光基本法にあたる基準法令の国際比較がもとめられるところだが、それを取り入れている大学は数えるほどでしかない。担当できる法学の関係者が非常に少ないのである。

私が国際観光学を柱の一つに目指してきたのには、豊橋キャンパスが前提になっていたところがある。しかし名古屋キャンパスに移ったとなると、経営学部があり、そこには観光学の専門家がおられ、科目も設けられている。また、豊橋キャンパスでは、国際コミュニケーション学部の移転とほぼ入れ替わりに地域政策学部が発足し、そこでは「観光・町づくり」がコースに組み込まれ、専門の担当者が受け持っている。地元での観光育成に重点をおいている点で少し違いはあるが、国際コミュニケーション学部が豊橋キャンパスに所在するのなら、近似した形態になっていただろう。

そうしたことから国際コミュニケーション学部として観光学を推進してきた頃とは、前提が変わってきている。大学全体で観光学を小規模でも柱の一つに考えるのであれば、やはり経営学の系統の方が社会のニーズに応えることになると思われる。

4-7. 読み・書き・外国語

前提の変化は、それまでの制約がはずれたことをも意味している。これまでは、文学部との住み分けが判断の目安であることが多かった。しかし名古屋キャンパスでは、その制約は小さくなった。加えてキャンパスを同じくする学部はいずれも社会科学系であり、また現代中国学部は中国に特化したコンセプトで運営されている。そのため、国際コミュニケーション学部が人文系の持ち味に力点をおいてもよくなってきている。もとよりそれは、国際文化関係論や現代社会を理解する社会学系の諸分野も併せてという広い意味である。ちなみに、文学部について言えば、一見実社会との接点が小さいように見えるが、就職などでは企業の評価は意外に高い。それは、文学部の卒業生が、文章を読んだり書いたりする能力において優れていることによる。

そうした前提の変化、またそれが今後も基礎的な条件となることを考えると、文系の基本に立ちもどることが大事ではないかと思う。それは何か言うと、古くて新しいフレーズが教えている。昔は、〈読み書き算盤〉と言われた。ソロバンは経済学や経営学のおはこだらうが、国際コミュニケーション学部なら、それに代わるのは外国語である。つまり、〈読み・書き・外国語〉という単純明快なコンセプトでよく、実際に教育が十分になされるなら、それで社会はみとめるだろう。もちろん、現代社会は机の前だけでなく、活動への姿勢を有無も問うところがある。エスノロジーだけがそれではないが、フィールドワークや国内外の実習を組み合わせる工夫ももとめられる。

V. 最後に研究のこと

5-1. 講義は教育と研究の交点

愛知大学で送った年月は、また研究と教育の期間でもあった。それまたさまざまな思い出につながるが、これから長く勤める同僚に、書き残しておく方がよいとことが一つある。それを明言する資格があるかどうかは覚束ないが、目指したものはそれだった、という意味で触れておく。それは教育と研究は別ものではない、ということである。特に私の場合、それは「講義」だった。もっとも私は最初から講義を担当していたわけではない。ドイツ語の教員として採用されたので、当初は語学の初級や中級だった。その後、文学部の「文学概論」を担当したのが、講義科目の最初になった。主に英文学の山口啓三教授の計らいだった。「ドイツ文学史」もしばらく受け持ち、主にバロックの詩論と啓蒙主義時代を解説した。先年、その頃の受講者がスイスに暮らしていて、私の「オシアン」の講義を覚えている、と言ってきたのは感慨だった。

私はドイツの大学で勉強したことがあるので、講義が何であるかについて多少考えるところがあった。そこでは講義は届け出でだけで試験が科されない。しかししたいの講義

には大勢の学生が集まり、社会人の聴講者も多い。しかも大学や学部を代表するような教授が講壇に立つ。講義とは、そこでしか聞けない新知見や独自の見解が発表される場であり、それゆえ大学の看板である。それはこのところ、日本のなかでも世界的にも、有力な大学が講義を社会に提供したり、ネット化したりしていることから知られよう。ちなみに、理系とちがって、文系の場合、専門だから一般には理解できない、とは軽々には言えない。史料批判とか極度に専門的な検証事項を講義で取り上げるのはお角違いだ、分野の概説のかたちでそれぞれの見解を盛りこむことはできるはずである。講義とは、その分野の基本をおさえた上で、自分の見解として何を言えるか、が問われる場ということになる。それが常に頭の片隅にあって、時には偏頭痛さながらの圧迫だった。「文学概論」を担当したときなどは、言語藝術論や韻律学や演劇論や文学史をもう一度勉強しなおした。多少若かったので、それが基礎づくりになった。

その後、国際コミュニケーション学部の一員になり、ここでは「比較文化論」、「ヨーロッパ民俗論」、「現代フォークロア論」、「民具・民芸論」、「国際観光論」、「国際観光地理」、さらに同僚の代理で「日本文化論」などを担当したが、自分の中で位置づけははっきりしていた。概説をおさえた上で、自分なりの何が言えるかという課題である。またそれを分かりやすく説明できるのでなければならない。したがって学生の反応は重要なのである。話をしている、それが伝わっているかどうかは空気で感じることができる。それを毎年入れ替えたり調節したりしながら続けた。それがある時点で論説になり、著作になり、また主にドイツ学界の諸見解を共有するという観点から翻訳になった。その点では、講義は私には土台であった。

とりわけ「比較文化論」は、現在は思想・文学・宗教と分割されて私は「思想」の部を担当してきたが、学部発足当初は1科目しかなく、しかも必修だった。相当の重圧で、しばらくノートづくりに集中した。モンテーニュ、ヘーゲル、マックス・ウェーバー、トインビー、そして和辻哲郎、梅棹忠夫を読み直した。それぞれについて基本として伝えることと、それへの自説を対比させた。その後、どの著作にも、それが程度の差はあれ役だった。もちろん著作や論説と実際の講義がぴったり重なるわけではないが、常に連続していた。とは言っても、値段の張る自分の本を教科書として買わせるようなことはしなかった。部分的にプリントにし、また Moodle 上で教材呈示のかたちで受講者に開放したのである。

5-2. 研究の遅れ

もっとも、書物の形にできるようになったのは、ようやく勤務歴の最後の10年だった。言いわけになるが、無駄足を踏んだために、少なくとも十数年は遅れたという残念さがある。要因は二つである。断続的ながら学内行政と直接間接にかかわったことと、もう一つ

は専門分野を変えたことである。もともと語学・文学だったが、30歳頃に、ドイツ系のヨーロッパ・エスノロジー／民俗学に転じた。ドイツ文字からは隣接学ではあるものの、その移行にたいそう手間取った。遅ればせの自己発見でもあったが、ドイツ民俗学については、当時、日本では系統だった情報も案内も欠けていた。そのため、極端に言えば一から勉強するしかなかった。30歳を過ぎた頃、頭に入れておくべき文献のリストを作ったが、大著から専門誌の論文まで含めると3000点ほどになった。そのすべて目に通したわけではないが、ある程度読み終えるのに十数年が費えた。しかも途中で、同時代のできごととして、ドイツ民俗学界では、それまでの方法論が根本的な変化するその分野なりの〈革命〉が起きていたことが分かってきた。情報としては早くから知っていたが、理解するには、否定された伝統の蓄積についても把握する必要があったのである。そしてある時、突然、学説の転換が理解できた。革命的とされる理論の根幹が、難しいことが論じられているわけではなく、当然のことに気づく人が現れたということじゃないか、と目の前の霧がみるみる晴れてゆく思いだった。と共に、それを体系化して提示するドイツの学問の厚みを改めて知った。

5-3. 分かってみると、現実とのずれ

しかし、現実との関係では、それが、歯車が狂う元になった。まだ分けがわからず五里霧中の頃は、期待する人が多かった。しかし分かった頃から、急に周囲がよそよそしくなった。それには期待して応援してくれたのが年長の大御所たちだったのが、その頃から学界の中心が私と同世代や少し若い人たちに交代したことも関係していた。そして、はっきり言えば、迷惑がられるようになった。つまり学界の通念と抵触するようになったのである。具体的に言えば、昔も今も、日本民俗学では柳田國男の所説が基本である。私を応援してくれた大先輩たちも、その系列だった。そして外の情報を入手しようという熱っぽさがあった。ところが、コアの世代が同世代となり、そこへ私の見解をもって臨むと、彼らの存在基盤を揺るがすように受けとめられた。柳田國男にはじまる基本理論で陣地を築いた上で、ドイツ民俗学の知識を装飾的に付け加えるなら、モダンで颯爽とした立ち居となるといったことだっただろう。が、おしやれではすまないとなると話は違ってくる。防衛機制がはたらきはじめたかのような反応に見舞われることが多くなった。

転機を挙げるなら、ヘルマン・パウジンガーの『科学技術世界のなかの民俗文化』を翻訳し解説をほどこしたのが、それに当たりそうで、ちょうど2000年頃である。もっとも、訳稿はそれより10年ほど前にはできていた。したがって順調に進んでおれば、英語よりも先に日本語で紹介されることもあり得たのだが、引き受ける出版社に行き当たらなかった。民俗学やエスノロジーをレパートリーとする大手出版社や専門書肆10社ほどの編集者も首をかしげるか、そもそも相手にしてくれなかった。日本民俗学会の理事長経験者が

斡旋してくれたこともあるが、それでも実らなかった。〈民俗学の人には外国のものは読みません〉という現実直視のコメントを何度も聞かされた。そうした事情で大幅に遅れたのだが、現在ではそれが世界の基準になっている。西洋各国語に加えて、中国語の翻訳も数年前に出て話題になった。韓国でも翻訳が進んでいると聞いている。たしかに難しいものではあるのだが、私の翻訳は、ふつうは固い術語が並ぶところをソフトに表現するのが持ち味のつもりでいる。嬉しいことに、英語訳ではわけがわからないのが、私の翻訳で、要するにそういうことなのか、と納得したという感想をときどき聞く。そうではあれ、科学的な技術機器が日常になった状況での民俗情念をどう把握するか、というのは、やはり思考が柔軟でなければ、問題意識そのものが成り立たない。

最近、定年を前に、場合によっては次の担当者に渡してもよいと思って身辺を整理していると、幕末から明治にかけての浮世絵が数十点出てきた。折にふれて集めたものだが、資料のつもりだから、初摺りほどの美術的価値はない。なかには、西郷彗星を描いた芳年の大判もある。西郷隆盛が自刃の直後、彗星となって現れた風評を描きとめたもので、偵察か迎撃かの気球が併せて描かれている。それは、「現代フォークロア」のある年度の講義の中で、科学知識と伝統的な思考とのからみあいを説明するために使ったものだった。また1990年代末のアメリカで、新興宗教が、信者を宇宙へ誘って集団自殺を遂げた事件の報道も何種類か集めていた。その教団の本部は、コンピュータと操作機器が並んで、まるで大型の科学プロジェクトの制御室だった。やはり、生活次元では科学技術とは何か、を考えていたときの材料である。これはほんの一例だが、そういう角度からの考察へ道を切り開いたのが、ドイツ民俗学の改革運動だった。科学知識と呪術の相互交替を歴史的に踏まえた上で、現代のそれはどんなメカニズムなのか、を問うのである。

だからと言って、これまでの研究の蓄積が無意味になるわけではない。私は、柳田國男の否定ではなく、古典理論の時代的な必然性を踏まえた上で、現代には現代の組み替えが必要なのだと説明している。しかし、関係者の身構えるような姿勢はなかなか崩れない。考えてみると、私と同世代や少し若い人たちでも、柳田國男以来の学問伝統を措いては、他に立脚点がない。そのため、そこに異論らしきものを呈されると、全否定されたような気持ちになるのは無理ではない。もっともこの数年の動きとして、すこし氷が解け始めた感じもするが、それはさらに次の世代が擡頭してきたことと無縁ではないように思われる。それがどこへ行くかはともかく、そんなことから、私は学界でもマイナーなのである。

しかし私自身が理解するのにかなり時間を要したので、多くの人がすぐには了解できないのも無理ではないとも感じている。あるいは本当のところを言えば、私が30年ほどかけて亀の歩みで進んできた行程だったが、頭のよい人たちならたちまち走り抜けるだろうと、期待半分、基礎作業に時間をかけるしかなかった巡り合わせの悪さへの悔しさ半分だったのだが、秀才たちが一向に地力を発揮しないのは予想外なことである。

そうした事態が、民俗学とエスノロジーのさまざまな領域で起きている。最も厚く知見が蓄積されているはずの口承文藝の分野ですら、意外なほど通念は保守的である。宗教民俗学も個別研究の労作はあっても、またそれはそれで重要であるが、基本理論は陳腐である。(紙媒体では刊行されなくなったので1980年代にまでさかのぼるが) 百科事典の記述も的はずれであったり誤認であったりする。スポーツをめぐる日常研究も、理論となると空白に近い。

数年前に、長く懸案だった『法民俗学の輪郭』という訳書を出したが、法民俗学は日本では未知である。百年ほど前にフランスで提唱され、ドイツで発達し、学説の変遷を遂げてきた。ドイツのヨーロッパ・エスノロジーの概説書で一章があてられているのは、不思議でも何でもない。この学問名称について情報をもたらす人がいなかった日本の方が異常なのである。そうした種類に取り組んでみるとよく分かるが、日本の場合、いったん分野が確立すると、人も予算も継続して安定したものになるが、そのすぐ隣には、新しい分野や、何かの都合で見落とされた分野が幾つもある。それらに気づいても、対応する分野が日本にはないので受け入れられもしない。

のみならず、よく知られた分野でも、すこし中へ入り込むと、同じ構図であることが分かってくる。近々、民藝論の本を出すが、民藝のテーマとなると日本では議論が皆無に近い。柳宗悦のその概念ばかりが語られ、folk art をめぐってどんな基本理論が西洋諸国で行われてきたのか、まるで紹介がされてこなかった。実際には19世紀末から今日まで、主だった論客だけでも数十人を数えるだろう。他にどんな理論があるのか、誰がどんな説を唱えているのか、情報が欠けているので比較することができず、時計の針が百年近く止まった観がある。そこで、主だった10人ほどの論説を紹介し、併せて自説を試みたのだ。これまた、講義科目「民具・民芸論」の私なりの重点項目の一つを本にしたのである。

一つ、と言うのは、そうした専門に立ち入ったことばかりではなく、講義では、ごく身近なことから取り上げたからである。たとえば、類似のデザインの日中韓の比較である。「松竹梅」と「十長生」と「鶴亀」の相互の関係といったものである。また一人膳を伝統とする日本の食卓がどんな経緯を経てダイニングテーブルのような囲み膳になったか、といった身近な話題を、日中韓のお膳を比較しながら説明したこともあった。そうした場合も、通説を紹介すると共に、自分なりの視点を組み込んだ。囲み膳では、江戸後期の中国ブームに転換への兆しをみるのが通説であるが、それに加えて、瀬戸内海沿岸の民俗調査の記録にも注目したのである。—— 少し、研究分野のことに入り込んだが、やはり言葉で言えば、人文系の学問も各所でガラパゴス現象をきたしている。期せずしてそこに接触してしまったのだが、考えてみると、その種のことは至るところで起きている。そしてたいへいは、通念と権威の波に吞まれて消えてゆく。私は、溺れる寸前のところで何とか浮いてきた。

5-4. これからのこと

定年の今日まで、もったのが不思議な感じがする。自分の都合で休むのは気が引けるが、晴れて時間がもらえるわけだ、とも思う。もとより、体力は低下している。スキーに出かけることもなくなった。水泳も止めてしまった。本も読みづらくなった、記憶力が落ちてきた、と情けないことを言い出すと切りがな。寿命の上限は見えているが、書きたい本、訳したい本を数えてみると、ちょうど折り返し点あたりである。復路が完走できるとは思えないが、一つ一つこなしてゆくしかない。そして、この年まで生きることがなかった同僚たちの顔が浮かぶ。みんな個性があって、光っていた。

事務の方々にもずいぶんお世話になった。今でも思うに任せないのだが、若い時には、読むのも書くのもひどく時間がかかった。しかも読むべき本や調べるべき資料は何百冊あるか何千点あるか知れず、切り立った崖を前にしているようだった。そのために大学の実務とのバランスがうまく取れなかった。あれこれ滞ったが、事務局にはよくカバーしてもらった。

たいていの委員を一通り務めたと思うが、特に長かったのは、学生部委員・図書委員・国際交流委員だった。教務委員は2期か3期だけだったが、途中で難しい問題が起きて、課長さんと何日も深夜まで対策を相談したことがあった。

学部長会議に出ていた頃のこと、人事課長が倒れたとの速報を受けた。過労と心労のためだったが、長く図書館の司書だった方で、共通の話題でしばしば時を忘れたものだった。あれからすでに18年になる。

白樺高原ロッジの下見に出かけたこともあった。私は、中国のいわゆる国画を若手の画家にでも依頼してインテリアにするのが愛知大学らしくてよいではないか、と意見を述べた。結局、名石を玄関前に据えることになり、中国からの運賃が恐ろしく高くついた。太湖石ならまだしも、名石を野外に置くのは中途半端である。そのあたりの調整に苦勞された事務の関係者も退職されて既に久しい。

大学の外での交流についても、思い出すと、あれもこれも浮かんでくる。毎年一度は行き来し、また数回まとまった期間滞在したドイツはもちろんである。が、それだけでなく、関係する学会に加えて大学の用務で何度も訪れた中国と韓国についても、私の人生歴では幾つも節目がある。何度か学生のフィールドワークに同行した西安の近郊、后寨村の思い出は殊に濃厚である。その折、西安社会科学院でドイツ民俗学について講演をした。周星教授が解説を加えつつ、会場の方々に説明をされた。その記録は、後に自著に収録した。

純粹な観光旅行はほとんどしなかったが、訪れた国は20か国をちょっと超える。果たせなかったのは、「眠る七聖人」にちなむ場所の広がりを追跡することで、ドイツ語圏とトルコは訪ねたが、他に中東、中央アジア、中国にも関係する場所があると聞く。もとより洞窟に眠る人たちが実際に各地に現れたわけではない。あやかっただけなのであ

る。古くは古代オリエントに遡り、キリスト教世界の各地で伝説が行われ、さらに「コーラン」に言及されて広まりに弾みがついた。そしてゲーテが、レクイエムの趣の長大なバラードに仕立てた。それをタイトルにした本を書くのは、かねて夢の一つなのである。

(2017年1月10日起稿、1月14日脱稿)